

500号記念

「善隣」の歴史、協会の歴史

古海建一（顧問）



広報誌「善隣」の発行が500号に達したことを会員の皆さんと共に祝いたいと思います。40年を超える長い年月を踏み越えてここまでできたことを嬉しく思うとともに、昔のことを思い出して感慨を覚えています。

500号というのは、この広報誌のタイトルが「善隣」に変わってからということのようです。その前に「善隣月報」という時代があったし、その前は「国際善隣倶楽部会報」というのも出されていました。長い歴史です。

私が協会に入ったのは30何年前で、昔の「善隣」誌の記憶はもう多くありません。でも時折り外の友人に見せたいような記事に出会いコピーを取っていた記憶があります。平成の初め頃からだったと思いますが、故村山孚会員によ

る中国古典紹介の長期連載——「史記」「三国志」「論語」など洒落な文章で楽しくて勉強になり、毎号が待ち遠しいほどでした。一方では何かごった煮のような広報誌だとも思っていました。昔は会員の寄稿が多くて、職業もさまざまで、折りに触れての政治解説、政局展望とか、プロ野球の優勝予想など週刊誌的な記事も結構あったからでしょう。

現在は講演会の記録を中心とした編集ですから、講演会やフォーラムのテーマ選びは協会のカラーを決める仕事となっています。だいたい前になります。講演会テーマについて会員アンケートを行ったときの記憶があります。予想通り多かったのが会員の関心としても、また協会の特色を保つためにも、中国、中国東北、あるいは満洲に関わるテーマを中心

にしてゆくべきとの回答でした。一方でこの広報誌を手にする人の多くは中国に大きな関心はもっているものの、専門に研究する人ではありません。狭いところを掘り下げるよりも中国のいろいろな面についての知識が求められていましたし、中国以外の国の政治・経済・文化についての関心も高いと思われました。

というように要望はいろいろあるので、講演委員会、広報委員会、そして編集者がこういう希望を掬い上げて、かつ厳しい予算の中で、バランス良く品位のある誌面づくりをやっておられることに感じています。

「善隣」誌の「顔」である表紙のデザインはいろいろ変遷を経ていきます。私が入会した頃は発刊当初からのスタイルで、黄色の四角形の中に「善隣」の文字

が座っている単純なものでした。文字の揮毫は77、87年に会長を務めていた岸信介氏の筆でした（因みにその前の「善隣月報」の時代は表紙というものはなく、新聞紙の形式でした）。

1992年に協会が創立50周年を迎えたとき、記念行事の一環で「善隣」誌の表紙が一新されました。題字の「善隣」と「国際善隣協会」の隷書ロゴは当時北京故宫博物館研究員・中国書法家協会常務理事であった劉炳森氏が協会の要請に応じて染筆したものです。表紙デザインは円の中に世界地図（の一部）を描いたもので、当時の石垣貞一理事の筆でした。協会の視野は世界が対象という図柄でしたが、水墨画風の地味なものでした。その後07年に表紙デザインが変更されました。金澤毅理事の見立てで白地に7色の模様が並ぶ芸術的なもの。不動産バブルがはじけてからの協会財政は厳しく、緊縮策により「善隣」もページ数の大幅圧縮を余儀なくされた時期がありました。そういうつらい期間を脱しかけたということ、ムードを変える意図であったと思います。11年に広報担当に田畑光永理事が就任、全体プロセスの合理化に大きな改革がなされましたが、このとき広報誌の顔も再度変わりました。表紙・

裏表紙併せて会員による写真を掲載するようにになったのは、印刷所の変更に加えて、まず表紙から会員参加を強調する狙いであったと思います。なお「善隣」と「国際善隣協会」の隷書字体は50周年以降ずっと同じものが使われています。

今月は「善隣」誌の発行が500号の大会に乗った記念の月ですが、協会の歴史は「昭和」「平成」ときて、（年号はまだ分かりませんが）3つ目の時代に入ろうとしています。協会の歴史を遡ると「満洲交友会」という団体に行き着きます。この団体が社団法人の認可を受けたのが1942年（昭和17年）2月2日です。すから、今月でちょうど満77歳、協会としてもいわば喜寿の祝いです。世の中に一般社団法人は3万5千ほどであると聞いていますが、当協会よりも古い社団法人はそう多くないと思います。

この77年の間に協会はいろいろな活動をしてきました。また運営上の大きな出来事もありました。協会史には詳しく書かれていますが、いわば節目の時期ですから改めて概略を振り返って見ましょう。

「戦中」

*（社）満洲交友会設立（1942年）、

3か月後（社）満洲会に改名

*（社）満洲会が鮎川義介氏より寄付を受け陶陶亭ビルを買収

*満洲国より康徳会館の全株式の無償交付を受け会館運営にあたる

〔戦後・1940年代〕

*（社）国際善隣倶楽部に改名

*別動隊として（財）満蒙同胞援護会（満蒙援）を設立。引揚者の援護事業を行う

〔50年代〕

*『満洲国年表』刊行

*大学、研究機関など、日中孤児問題連絡協会などに寄付を行う――1952年頃には資金不足をきたし康徳会館ビルを売却

〔60年代〕

*『満蒙終戦史』刊行

*『満洲開発四十年史』の刊行に当り一時期編集に従事。資金援助

*中国語奨学金制度発足（60、81年）

*陶陶亭営業赤字増大により閉鎖→陶陶亭ビル売却、新橋の現協会ビル購入

〔70年代〕

*『満洲国史（総論・各論）』刊行

*（社）国際善隣協会に改名

*「満蒙同胞援護会」と合併。満蒙援の業務は協会に

*引揚者一時金、恩給法改正要求運動

*満蒙関係終戦時殉難者追悼法要（築地本願寺）

*『満洲建国の夢と現実』刊行

〔80年代〕

*中国残留孤児の訪日肉親捜し始まる

*『中国問題研究所』設立

*善隣日本語教室・中国語教室設置

〔90年代〕

*関西支部（集会室）開設

*『国際善隣学院』開校

*『中国環境事業』（大気汚染関係）に進出。バイオブリケットの普及事業など

*創立50周年記念行事

――90年に会員数は最大（543名）を記録し、不動産バブルで賃貸収入も最大に達していました。この収入増を背景に関西支部（集会室）、国際善隣学院、中国環境事業（大気汚染対策）などの事業が次々に立ち上げられました。

また中国問題研究所は外部からの寄付で運営されていましたが、開設後10年で大口寄付が打ち切られて資金繰りに窮し、以後運営は協会の負担で行われることになりました。このようなプロジェクトによって資金負担が増大、更に会館の老朽化で補修費も増大、一方で、90年代後半には賃貸収入、会費収入とも減少傾向が強まり懸念が広がりました。

〔2000年代〕

――懸念が現実となったのは02年。大口テナントの退去に始まり急速にキャッシュフローが悪化しました。理事会は一定の条件を充たした場合の会館売却を提案しましたが臨時総会では意見が分かれ、収拾つかぬまま休会となりました。事態の打開を委ねられた再建委員会はテナント発掘と併行して銀行借入れによる設備の改善、人事の合理化などを行い、また事業については多額の協会負担のままで継続は不可能と判断、事業圧縮ないし独立採算運営を求めました。事業は個々の事情が異なるうえ縮小・廃止は容易ではなく、学院については12年の新法人移行の直前まで運営されました。しかしこれら一連の対応と緊縮政策の続行により状況は次第に改善、危機は回避されたものでした。緊急措置として削減した一部事業（講演会・広報誌関係など）の予算も復元し、銀行借入れも計画通り08年に完済されました。しかし会員の高齢化退会増、バブル後の不動産不況、会館ビルの補修費増大などの環境の下ではバランスシートの一層の改善が必要であり、緊縮財政はその後も継続されました。

*中国における植林事業始まる（日中緑化交流基金、緑の募金、JICA草の

根技術協力）

*中国残留孤児の国家賠償請求訴訟の支援を始める

*引揚60周年記念の集い（06年11月九段会館）

*JICA中国青年受け入れ事業などへの参加（98～2012年）

〔10年代〕

*公益法人改革、社団・財団法人関連の法整備の下で「一般社団法人国際善隣協会」に転換（12年4月1日）

*中国遼寧省葫蘆島市望海公園の「引揚記念碑」周辺に桜・松などを植樹

*会館ビル耐震工事完成（14年）

*引揚70周年記念の集い（16年10月銀座ブロッサム中央会館）

以上が事業を中心に見た協会史の概要です。活動の中で、とくに協会ならではの思われた事業がいくつもありました。まず50年代から70年代にかけて資料収集・編集・刊行が行われた旧満洲国関係図書の出版事業です。この時期になると満蒙やソ連抑留からの帰国者の生活も落ち着き、大陸での記憶はまだ強く残っていました。満蒙同胞援護会（実態は当時の国際善隣倶楽部と重なる）の編纂委員会が資料や聞き取りをもとに時間をかけ

て編集しました。その中で『満洲国年表』『滿蒙終戦史』『満洲国史（総論・各論）』は3部作として満洲研究の貴重な資料となっています。また個人の体験談に基づく『満洲建国の夢と現実』も刊行されました。満鉄調査部関係者を中心に纏められた『満洲開発四十年史』については一時期編集作業を分担し、また費用を負担して出版を支援しました。これらの貴重な資料を世に残せたのは協会なればこそその実績であったと思います。

教育関係の事業もありました。中国語奨学金制度は21年間にわたり日本大学生が中国語に親しむことを支援しました。80年代には日本語教室、中国語教室が設置されていました。そして協会が90年に開設したのが中国人就学生に日本語を教える国際善隣学院で、当時この種の学校はほとんどありませんでした。ただ教えるだけでなく親身に世話をする学校にしたい、学院の赤字は協会が負担する、など意気込んで始めたものでした。そして学院経営は22年間続けられました。問題は日本語学校の増加につれて学生の確保が困難になったこと、厳しい入管審査、また規模の利益に達しなかったことなどでした。財政面の見通しが得られないことから協会が一般社団法人に転

換するに際して閉鎖の止むなきに至りました。

中国における植樹も地味ながら協会らしい事業と言われています。簡単に「植林」と言いますが、広い中国のあちこちが現場でプロジェクトの内容もさまざまです。現地での苦勞もさることながら、基本的に中国側としてJICAほか日本側の機関との信頼関係のうえでなされたもの。それは八島継男顧問の努力により支えられたものでした。

もう一つ。今は話題になることが少なくなりましたが、中国残留孤児への協力は長く続いた協会の事業でした。すでに50年代に日中孤児問題協会への寄付の記録がありますが、76年に日中孤児問題連合会が結成されたとき協会と会員が参加しました。80年代初めからの訪日肉親調査には協会員が毎回ボランティア（相談・通訳）参加しました。90年代には残留孤児・残留邦人の帰還促進、定住支援、老後支援等々について議員連盟、厚生省、法務省などとの懇談、要望が数多く行われました。94年に制定された「支援法」は問題が多く、孤児たちが「国家賠償請求訴訟」を提起したとき、協会は応援の署名運動を行い、原告団に事務所を提供しその支援団体となりました。問

題が一応の解決を見た後も孤児たちの団体に勉強や会合の場所を提供するなど便宜供与を行っています。

なお、協会が携わった事業の中で、協会にとつての財政負担が最大であったのが中国環境事業（大気汚染対策）でした。バブル末期に着手した事業で、当時の空気は協会財政の将来に楽観的で強気——そういう時代でした。更に言えば昔の協会は財務問題を軽視した傾向もあったと思います。

今の協会運営は重荷になる事業を整理して危機の時代を脱し、緊縮財政の継続でバランスシートも改善しました。一方で会員の高齢化、会館の老朽化などの与件は依然として残っています。

協会が続けている昔からの事業は各種講演会など、それと広報誌「善隣」の発行です。これらはもともと協会の基本活動でしたし、一般社団法人への転換時にその継続と公益目的支出を予定して認可を受けています。この分野を中心に据え、身の丈の範囲内で選別的な活動をする今のやり方は、協会を取り巻く環境が厳しい中で、健全財政を維持して変化に備える賢明な途でありましょう。

世の中には一般社団法人が何万とあって、目的も活動内容も会員もさまざま

す。業界団体もあれば、社員参加・奉仕型の団体、特定の国や地域が対象の団体もあります。そういう中で現在の協会の運営内容は社員のための社団法人としての安定した形だと思っています。それは中国を主テーマとし、その他の領域も含めた講演会・フォーラムを毎月いくつも開催し、広報誌を発行し、会員のための囲碁・書道・俳句・謡曲など歴史の長いサークルをもち、会員親睦の会合や旅行を催す—こういう形で存在し得るのは会館あればこそなのですが、今の協会はその活動を維持・充実させることで存在意義を十分果たしているものと考えます。

振り返ると私は過去数十年間、協会で数多くの楽しい方々、魅力ある方々と出

会うことができました。また知識を加える場や賑やかな集まりなどに数多く参加してきました。自分にとって貴重な経験でしたし、それが社団法人に属することのメリットだと思います。今回は協会が過去行った事業を振り返って見たわけですが、私は実際に協会が果たしてきた大きな業績の一つは、数多くの会員の出会いの場、交流の場、研鑽の場を提供してきたことであつたと思います。それは今に続いているのです。

皆さんどうか今後とも交流の場を広げて下さいますように。そして「和」の気持ちによって協会活動を盛り立てて下さいますようお願い申し上げます。

関西地区会員より

当協会が発行する「善隣」誌は、第何号という呼び方に「No」(ナンバー)と「通巻」の2つの数え方がある。前者は、42年前の1977年7月に「第1号」が発行され、「善隣」と名付けられてから2019年2月号で500号を数えることになった。因みに、後者は、それより以前に「国際善隣倶楽部会報」とか「善

隣月報」という名前で発行されていた時代があり、それらを含めると通算で第何号という言い方をしている(『国際善隣協会70年のあゆみ』)。

今般、この500号で地方会員の声をぜひ載せようという機運が盛り上がり、「関西地区」会員にお願いをしたところ5名の会員から寄稿をもらうことができ

た。テーマは「自由に書いてください」とお願いし、原稿の到着した順番で掲載をさせていただくこととした。

(事務局長 藤沼弘一)

引揚二世

滋賀県立琵琶湖博物館・館長

篠原 徹〈滋賀県近江八幡市〉



引揚二世という言葉がどのくらい定着しているのか知らないが、社会的に認知されているとは思えない。「善隣」を知るキッカケになったのは、引揚という戦後の社会現象に強い関心をもつ研究者とたまたま知り合いであつたからである。